

前、皇国史観が支配的だったころ、中村吉治氏が卒業論文で農民史をやると言った時、平泉澄から「百姓に歴史があると思うのは、豚に歴史があると思うのと同じだ」と言われたという(中村吉治「農民史探求と社会史」『歴史評論』410)。このような時期に近世農村史は研究されなかったし、村方文書は史料としての価値を認められていなかったことは言うまでもなからう。戦後になって農村史料の調査が行われ、村方文書を用いた農村史研究が進められた。これには、農地改革その他による農村社会の変貌の中で農村史料の散逸が危惧された事が引き金になったであろうが、また一方では歴史観・歴史意識の転換があったことは言うまでもない。今日のレベルから見れば、当時の史料調査に限界があったと言うことはたやすい。しかしここから始まった村方文書を用いた歴史研究が、村方文書の史料としての価値を共通認識にしていっていったことは明らかであろう。その後、歴史研究の展開と歴史資料保存利用機関や歴史系博物館の発展の中から、現状記録の方法など史料調査の方法についても摸索が続けられ、様々な経験が蓄積されてきた。それらがまた近世の村方文書だけでなく、近現代の様々な文書についても史料としての価値認識を我々の間に定着させてきたと思う。

今回、史料ネットの活動の中で問題になっている市民と研究者の史料についての理解のギャップという点について考えてみよう。ここでは史料一般として問題とされているようだが、近世以前の史料と近代以後の史料では認識に落差があることは間違いなからう。それは近代史研究の現状、特にその史料の利用の在り方と関係があるのではなからうか。近代史研究で、個人や団体の所蔵史料がまだ十分利用されていないのではないか。すなわち、史料としての価値認識は、その史料を用いた歴史研究の発展があって初めて共有されるものであろう。その意味

— φ — φ — φ — φ — φ — φ — φ — φ —

歴史研究者、一步前へ

山本幸俊 (新潟県立文書館)

この二年間、地方にあって、遠くから史料ネットの活動が気になってきた。未曾有の大震災後、我が国で初めて展開された歴史資料救済活

で、市民と研究者の史料についての意識のギャップを埋めるには歴史研究の発展が必要であり、そのためには一定の時間が必要なのである。

このように考えると、史料ネットの活動の中から歴史学の(ひとつの)課題が提起されているということであり、性急にこれまでの歴史学はダメだったという結論にはならないであろう。むしろ歴史学や史料論の発展が、あるいは歴史学にかかわる者たちの集団的な力量の蓄積が史料ネットの活動を可能にしたと言えるのではなからうか。同時にまた、歴史的に見ることで、この史料ネットの活動を歴史学の課題を問い直す契機とすることも可能となるのではないか。それにかかわって、当然のことではあるが、ある家から出てくる史料は近世、近代で区別されないということを多くの近代史の若手研究者が身をもって経験したことの意味は大きいといえよう。このことが先に触れた近代史研究の在り方を問い直す契機となると思うからである。

史学概論で、史料についての市民と研究者のギャップという論点についておおよそ以上のようなことを話したのであるが、さらに具体的に、史料ネットの活動がなぜ可能になったのか、その史学史上の意義はどこにあるか、を考える必要を感じていた。それによって、この経験が今後発展的に受け継がれ、また多くのエネルギーを投入した院生を中心とする若手研究者たちの自己確認につながると思ったからである。

昨年の特設部会での報告・討論でも、どちらかという問題点の指摘が前面に出ているという印象をもち、「なぜ、史料ネットの活動が可能になったのか」という視点からもっと討論すべきではないかと発言したが、それはここまで述べてきたようなことを考えていたからであった。今後の総括の中では、このような方向からの議論もされていくことを期待したい。

動は歴史研究者のボランティアとして始められたのに、はからずも歴史研究者の在り方を問うことになっている。それは市民との乖離を突き付けられたことで歴史研究者にとって重い現実となっているようだ。「歴史学とは何か、どうあるべきか」。戦後、民主的歴史学が最も気に掛け、とうに解決してきたと思いついてきた問題が、実は誰にもよくわかっていなかったのではない